

『練習しないで、字がうまくなる!』

阿久津直記著／サンマーク出版

陽子の周りを電子が回っているのは地球の周りを月が回っているのと関係が無いように血液型と人の性格は何の関係も無いし、字はそれを書いた人の人柄とは何の関係も無い。というわけで、字は情報伝達のための単なる記号であると割りきってしまったが故に、私の書く字は大変な事になってしまった。読めはするのだがクセさえ無く、どこから来てどこへ行くかわからない過去と未来を同時に失ってしまったかのような字。不幸なことに、下手であっても字の美しさを感じる能力はある程度あるもので、自分の字を見ると時として戦慄が走る。

私は毎年大勢に数学を教えているのだが、不得手な事を勉強する学生さんの苦勞を理解するために、時々新しいことに挑戦することになっている。今回は練習しなくてもペン字がうまくなる本である。表紙に「手よりも頭を使いなさい。大切なのは、意識の持ち方・考え方」とある。

冒頭で、「練習しても、字はうまにならない」と突き放される。書道家のように命がけで字を書きまくるなら別だが、普通の人は字がうまくなるほど練習するだけの時間を持っていない。練習しない分、頭を使って書くべきなのだ。更に「日常生活で必要とされているのは、読みやすく、人を不快にさせない程度の字」と、明確に目標設定される。そして、うまい字を書くための具体的な話が、例えば、ペンは0.5ミリの顔料ゲルインキのボールペンが最適で、その根拠も非常に詳しく書いてあり、頭ごなしに決まりごとを押し付けることがない。そして、うまい字を書くためのペンの動きが、ルール化して説明がなされる。

この本は、あちこちに「字は丁寧に書きましょう」のような当たり前に思える言葉が書かれているのだが、なぜ丁寧に書かねばならないのかという理由や、丁寧に書くということの具体的な方法が詳しく説明されるので、その言葉が新たな輝きを帯びることになる。最も印象的なのは、「字は図形です」である。著者は書の専門家であるから、字はそれを書く人の精神が現れるとかなんとか言いそうなものなのだが、うまい字が書けるようになる必要はない、うまく見える字が書ければよい、と主張する。これを数学に当てはめると「数学を理解する必要はない。理解しているように振るまえば十分である。」ということになるだろうが、これは数学教師がまず言わない言葉だろう。

のし袋に名前を書く時は、最初に補助線を鉛筆で入れなさいと言う。補助線有りて書いてもへたなのに無しでうまく書けるわけがない。実際にはいくら字をうまく書きたいと願っていても、補助線を書く人はほとんどいないそうだ。目標がはっきりしていれば、それを達成するために効果的な手段を選び、自分を助けるのは当然なのに。本当に必要とされているのは、目標の達成を真に願うことである。ちなみに、数学でも苦手な人ほど補助線（補助線の意味が違うが）や計算の過程を書かない傾向がある。人は案外自分の幸福を望んでいないのかもしれない。

うまい字を書くには、ゆっくり時間をかけて書け、と言う。これも当たり前のようだが、もともとうまくて才能のあるプロでさえゆっくり書いているのに、せつかに書いてうまく書けるわけがない、という指摘はもっともだ。数学でも、学生さんは「××が分かりません」と簡単に言うが、実は学生さんが分からない部分は本質的に難しい場合が多く、専門家でさえかつてそれを理解するのに非常に大きなパワーをかけた所だったりする。それをちょっと考えただけで分からないとか数学は苦手だとか面白くないとか言うなんざ百万年早いわっ、（汗）ノゴルァー！（演出の都合上、若干乱暴な言葉を用いています）というわけなのである。

本書を読んで字がうまくなる人は大勢いるはずである。私はと言うと…実はそれほどうまくなりたいと思ってない自分を発見しただけ…だったりして。

執筆者紹介

原 信一郎

教育開発系准教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『練習しないで、字がうまくなる！』阿久津直記著 サンマーク出版 2011年
1,470円

ブックガイド目次へ